

ITP-EUROPA 委員会宛派遣報告書

氏名：野田茂恵（博士後期課程）

派遣先：ボローニャ大学他（イタリア）

派遣期間：2011年1月5日～2011年3月3日

【派遣の概要】

今回の短期派遣の目的は、20世紀前半の作家、アルベルト・サヴィーニオ（Alberto Savinio）の散文作品の一つ、「君に告げる、クリオ/Dico a te, Clio」に関する調査を行うことである。この作品はサヴィーニオが1939年にイタリアのアブルッツィオ州とラツィオ州を旅した時に記された旅行記である。報告者は現在、諸芸術の相互関係をテーマに博士論文を準備している。ここで扱う諸芸術とは主に文学と絵画という二つの芸術分野であり、言語と視覚をめぐる知覚認識という主題を軸に主に言語としては研究対象のイタリア語を選択し、19世紀から20世紀初頭の西洋絵画、とりわけイタリアで展開された視覚芸術と言語との相互関係に関する研究を行っている。今回の現地イタリアでの二か月の研究期間の間は、20世紀初頭にシュールレアリズムの動向に深く関与し、その作風は文学作品にも見られる画家であり作家であったサヴィーニオを主な研究対象とした。サヴィーニオに関する研究資料は小説から美術批評まで、膨大なテキストが残されているが、今回の派遣はイタリアに二か月という長期の留学期間を得、現地での調査を有意義なものとするために、サヴィーニオが1939年の夏に旅した時の記録が収められた旅行記、『君に告げる、クリオ/Dico a te, Clio』を研究対象にしぼり、作家が訪れた場所を実際に訪れ、その場所や事物がどのように描写されているのかをテキストと照らし合わせながら探ることを現地調査での目標に掲げて調査を行った。また、今回の調査は今秋からの留学予定地であるボローニャに拠点を置き、ボローニャ大学で行われている19世紀初頭の作家であり、報告者が研究対象としている作家のひとり、ガブリエーレ・ダンヌンツィオの詩集「アルキオーネ/Alyone」を分析する20世紀イタリア文学に関する授業に参加し、サヴィーニオの調査に並行してこの授業を受講した。

【派遣の成果】

以下に調査実施地および期間、実施内容及びその成果を表にまとめた。

1)～7)は実施内容の補足内容。

短期派遣実施内容

日程	場所	実施内容
2011/1/6	ローマ	到着
1),2) 2011/1/7～9	ローマ	ジョルジョ・デ・キリコ美術館観覧 マリオ・プラーツ美術館観覧
3)2011/1/12 ～2/24	ボローニャ	ボローニャ大学にてイタリア文学の 授業受講 注3)
4) 2011/1/ 22	ペスカーラ	サヴィーニオの旅行記の現地調査 注4)
5) 2011/1/ 23	フランカヴィツァ	サヴィーニオの旅行記の現地調査
6) 2011/2/25	ミラノ	サヴィーニオの展覧会観覧
2011/2/26	ローマ	移動
7) 2011/2/27	タルクイーニャ	サヴィーニオの旅行記の現地調査

～3/1		
2011/3/3	ローマ	出国

- 1) ジョルジョ・デ・キリコ (Giorgio De Chirico) は兄のアルベルト・サヴィーニオとともに形而上絵画を提唱しその後展開される 20 世紀西洋美術に大きな影響をもたらした画家である。デ・キリコ美術館はキリコが実際に 1968 年まで住んでいた家に現在は一部の作品が展示されている。ここに飾られていた作品は 1910 年代に画家がカルロ・カッラらと提唱した形而上絵画として世に送り出した作品群と同時に、新形而上絵画と呼ばれる後期の作品が展示されており、形而上絵画という一つの絵画様式の中にも時代変遷によって推移する特徴があることを理解した。新旧の具体的な作品の特徴は、まず 60 年代以降の作品にはキリコの作品に頻繁に見られるマネキンのモチーフは後期の作品に多く、前期の作風よりもより人間的な姿になっている。また、楽器のモチーフが後期形而上絵画に多く見られる。また、画家のアトリエにある様々な美術や制作の際に参考にされたと思われる蔵書の中に、日本の工芸家、俵有作の「日本の凧」という本が置かれていたことは、日本の美術、それも凧のデザインに興味を持っていたという画家の親日的な側面が発見できたという意味で興味深い。

- 2) マリオ・プラーツ (Mario Praz) は昨年本学紀要に投稿した拙稿「感覚と言語の相互作用に関する考察—ガブリエーレ・ダンヌンツィオ『快樂』の場合—」で研究対象とした作家、ガブリエーレ・ダンヌンツィオ (Gabriele D'Annunzio) の小説、『快樂』を知覚認識という主題を軸に分析した際に参考文献として取り上げた『蛇との契約—ロマン主義の感性と美意識—』の著者であり、同者は 19 世紀後期にヨーロッパ各地で興隆した頽廃芸術を研究する際に欠くことのできないイタリアの代表的研究者である。プラーツが住んでいた住まいは現在美術館として開放されており、『快樂』の舞台となった 19 世紀末の家具や絵画を観覧することができた。入口には左壁に大きな洋服クローゼットがあり、それはダンヌンツィオから購入したものと聞き、作家とプラーツの間に交友関係があったことがわかった。プラーツの家は、美学者の家らしく、家主の家具へのこだわりが屋敷内の隅々まで見られた。例えば、プラーツは屋敷内にある部屋を 8 つの色で染め、その色をテーマの色ごとに替えた内装にした。作家は拙論でダンヌンツィオの作品に見られる色彩の描写について分析を試みた際、この作家に黄金の色を好む傾向があることに触れたが、プラーツもまたダンヌンツィオと同様の色彩趣味を持っていたことがわかった。この点を実証するのは屋敷で最も重要なリビングで使われている色はやはり黄金であったという事だ。そして招かれた客が第一に通されるこの部屋にはプラーツの室内装飾への緻密な配慮が見られる。壁一面に飾られた絵を見ると、額を架ける留める釘を隠すために金で細工された留め金が施されている。また、プラーツが理想とした 17 世紀ナポリ王国の室内画に描かれた家具がこの黄金の部屋には実際にプラーツの意図によって見事に再現されている。

- 3) 当初受け入れ先のボローニャ大学文学哲学科講師ステーファノ・コランジェロ氏の授業を受講する予定であったがこの時期は既にテスト期間に入っていたため、コランジェロ氏を指導したニーヴァ・ロレンツィーニ教授の授業を受講した。受講した授業は毎週水・木・金曜日、午前 9:00～11:00 である。授業内容は 20 世紀イタリアにおける詩人の作品を挙げ作品の内容を分析するという内容であった。この授業ではアンドレア・ザンゾット (Andrea Zanzotto) をはじめとする 1950 年代以降の現代詩人たちの作品に触れる機会を得ただけでなく、ダンヌンツィオの詩集『アルキオーネ/ Alcyone』の詩の分析についてロレンツィーニ氏の解説を聞くことができた。この詩集は報告者が研究対象とする詩集であるため充実した講義内容となった。

- 4) ペスカーラ市内にある作家ダンヌンツィオの生家 (現在記念館) を訪ねた。

- 5) フランカヴィッラにある画家フランチェスコ・パオロ・ミケッティのアトリエを訪ねた。サヴィーニオは当時訪れたミケッティのアトリエについて『君に告げる、クリオ』でミケッティが自ら設計しアトリエとして利用していた家の窓の形に言及している。画家としてのサヴィーニオが当時影響を受けていた前衛芸術、とりわけキュビズムは四角や三角といった角を好む傾向があり、サヴィーニオ自身もその立場にただけに、円を積極的に自らが建築した家に取り入れたミケッティに関心を示し、同時にプロタゴスを引用し、ギリシャのソフィストが円を完全な形体であるとし、肯定的に捉えられていたことを再認識しながら、円が同時に不滅の象徴であることに触れる。このアトリエは第二次世界大戦中ドイツ軍の空爆によって消滅してしまったが、現在はミケッティ美術館に模型としてこの家が再現されており、作家が「まるで二つの目玉できており、片目は海を、もう片方は松林をのぞいているようだ」（『君に告げる、クリオ』49頁）と描写するその窓の様子を模型ではあるが眺めることができた。ミケッティ美術館には当時この海辺に建てられたこの家に飾られていた代表作「片端と蛇 / *Gli Storpi e Le Serpi*」が長年の修復を経て保存されており、この巨大な油彩画を鑑賞することができた。館長の導きでミケッティの実孫アントニオさんとお会いする機会を得、ミケッティがアトリエに改装して買い取るまで修道院として使われていた建物を案内していただいた。このアトリエにも二つの大きな窓があり、片方は海の景色、もう片方は田園が見えるよう設置されていた。ミケッティが住んでいた屋敷は現在アントニオさんも住まいとして生活している。拙稿で扱ったダンヌンツィオの小説『快樂』は深い親交のあったミケッティのこの住まいで夏休暇の間に書かれた。
- 6) 2月24日よりサヴィーニオの展覧会がパラッツォ・レアーレで始まった。この会場で行われる企画展は毎回イタリア国内で注目が集まる所だが、今回の展覧会は「アルベルト・サヴィーニオ コンメディア・デッラルテ」と題し、サヴィーニオの絵画作品150点をはじめ、サヴィーニオが手掛けたオペラ作品の衣装や背景の再現などが展示されており、いままで見たことのない画家の絵画作品に直接触れることができた。
- 7) ラツィオ州地中海沿岸の古代都市タルクイーニャを訪れ紀元前5、6世紀に形成されたエトルリアの墳墓とエトルリア文明を知ることのできる市立美術館を見学した。『君に告げる、クリオ』に言及のある墳墓のうち、いくつか現在一般に公開されていない墳墓もあったが、かろうじて「狩漁の墓」、「祝福の墓」、「雌獅子の墓」を観覧することができた。

【今後の課題】

二か月の派遣を終えて、ダンヌンツィオとサヴィーニオという二人の作家の足跡をたどることで両者の接点を見出すと同時に、19世紀初頭から20世紀初頭のイタリア文学の流れの一端を覗くことができた。今後はサヴィーニオという作家の視点からダンヌンツィオの作品を読み解くという新たな研究課題をふまえ、博士論文の目的である言葉と知覚認識の相互関係に関する論文を具体的に組み立て直し論文執筆を進めていく。目下の目標としては今回の調査をもとに、サヴィーニオの残した紀行文と絵画作品を対象としたサヴィーニオの知覚認識論についての論文を今後博士論文の構成を念頭に仕上げ、研究の結果を今夏「日伊文化研究第49号」に研究論文として投稿する。